

聖ニコライ・ヤポンスキー

アレクサンドル（ミレアント）司教

目次:

生涯	2
その使命.....	4
函館	8
最初の成果.....	10
ロシアからの支援.....	15

聖書およびその他の必要書籍の翻訳	16
戦争	23
晩年と死.....	26
聖ニコライ大聖堂.....	29
ニコライ・ヤポンスキーの言葉と教え	33
試練に備えて魂を整えよ	33
マカリー（ネフスキー）大主教への手紙より	37
結び	42

生涯

使徒に等しいニコライ（カサトキン）は、日本教会の創設者であり初代総主教であり、20世紀を代表する傑出したロシア人宣教師である。1912年に永眠し、没後60年となる1970年3月31日に聖人として列聖された。

この献身的な宣教師は、その生涯と全力を「日の出ずる国」における福音の宣教と神の御言葉の播種に捧げ、その使徒に等しい働きは豊かな実を結んだ。長名和光雄は次のように記している。「彼は後世に大聖堂1座、教会8か所、小教会175か所、教区276か所を残し、司教1名、司祭34名、助祭8名、説教者115名を育て上げた。正教会の信徒総数は34,110人に達した.....」

日本を訪れたイ・ヴォストルゴフ大司祭は、次のように記している。「日本において、天皇に次いでこれほど国内で名を知られていた人物は他にいなかった。日本の首都では、ロシア正教宣教所の場所を尋ねる必要はなかった。「ニコライ」という一言を言うだけで、文字通りすべてのリキシャが、宣教所の客をどこへ連れて行けばよいかを即座に理解した。正教会の教会も「ニコライ」、宣教所の所在地も「ニコライ」、さらには正教会そのものも「ニコライ」という名で呼ばれていた。ロシアの司祭の服を着て国中を旅していると、私たちはいつでもどこでも優しい眼差しに迎えられ、私たちに関する挨拶や会話の言葉の中から、理解できない言葉や表現が混じる見知らぬ言語の中に、一つだけ馴染み深く愛おしい言葉——「ニコライ」——を耳にすることができた……

1聖人をよく知る著名な東洋学者D・M・ポズドネエフは、次のように回想している。「彼は穏やかさと同時に、いかなる障害もものともしない鋼のような人物であり、実務的な知性と行政手腕を兼ね備え、いかなる困難な状況からも打開策を見出すことができた。その愛想の良さとは裏腹に、彼は、厳格な措置をもって躰ける必要があると認めた人々に対しては、冷徹で、断固として、きつい態度をとる能力も備えていた。何かを懲らしめたり、制止したりするためである。社交性とともに、彼には長年の経験と苦難の試練を通じて培われた非常に大きな自制心があり、彼の信頼と率直さを勝ち取るには、多くの時間と努力が必要だった。陽気な会話相手としてのどこか子供のような純真さとともに、彼には大局的な政治家の広い理想、祖国への限らない愛、祖国の苦しみへの共感、そしてその苦悩を自らのものとして受け止める姿勢があった…… 広大で神聖な理想、鉄の意志、そして尽きることのない勤勉さ——これこそが大主教ニコライの本質である。」

聖人の伝記の一つを著したA・プラトノワの次の言葉に同意せざるを得ない。「彼についてより詳しく知ることは、あらゆるロシア人の義務である。なぜなら、ニコライ大司教のような人々は、自国の誇りであり、栄光だからである。」

彼の活動は多くの苦難を伴った。ニコライ大司教は双方から迫害を受けた。日本側は、彼をロシアの政治工作員、スパイ、扇動者として、日本の土壤に裏切りや、背信的で略奪的なロシアへの同情を撒き散らす者として扱った。一方、ロシア側は、日本が知る必要のないロシアに関する情報を日本に漏らしている人物として彼を非難した……。このように、大司教の活動は役に立たないばかりか有害であると見なされ、ロシア国内の多くの人々は彼自身を、奇妙な妄想に囚われた変わり者だと見なしていた。大司教ニコライをその使命のために救ったのは、生涯を通じて彼を導いた二つの思想であった。第一は、使徒的奉仕、すなわち異教徒の間で正教を広めるという偉業への思いであり、第二に、自身の活動は政治とは一切無関係であるべきだという熱い確信であった。」また別の箇所では、「彼は、この世の目的のためではなく、自分の中に秘めていた何かを深く心に刻んでいた。」

その使命

イワン・ドミトリエヴィチ・カサトキンは、1836年8月1日、スモレンスク県ヴェルスキー地区のベレザ村で生まれた¹。父のドミトリー・イヴァノヴィチ・カサトキンは、村の教会で助祭を務めていた²。幼い彼は、栄光ある預言者、主の先駆者であり洗礼者であるヨハネにちなんで、ヨアンと名付けられた。母クセニア・アレクセエヴナは、彼がわずか5歳の時に、34歳で亡くなった。

極度の貧困にもかかわらず、少年はまずヴェルスク神学校に、その後スモレンスク神学校へ進学させられた。S・ネダチンは次のように記している。「鉄道がなかった当時、この青年は、神学校で教育を受けるために、恐ろしい——そして今もなお——ヴェルスクのスラム街を抜け、州都スモレンスクへと向かわなければならなかった。当時の神学校生全員が馬に乗って通学していたわけではない。カサトキン少年も属していた最も貧しい多くの学生たちは、神学校の門をくぐるために150ヴェルスト以上もの距離を徒歩で歩かざるを得なかった。」

1856年、彼は神学校を優秀な成績で卒業し、国費でサンクトペテルブルクの神学アカデミーに送られ、そこで1860年まで学んだ。

モスクワのニキティンスカヤ通りにある「主の昇天」教会の信徒たちにより、この村のあった場所には現在、トヴェリ州オレニンスキー地区モストフスキー農村管区のベレザ村があることが確認された。1836年、ベレザ村はヴェルスキー地区の に属するベレゾフスカヤ・ヴォロスティの中心地であり、5世帯（男性7名、女性6名）が居住していた。村にはもはや一軒の家も残っていない。村の教会は第二次世界大戦中に破壊された。

聖人は、父が亡くなるまで世話をし、毎月、給料の一部を父に送っていた。

この青年は並外れた才能を示しており、教授としての活動に備えるためアカデミーに残留するものと見られていたが、日本へ渡るという決断が彼の運命を一変させた。

その決断はまったく予期せぬものであった。聖ニコライ自身の証言によれば、それまで彼には修道生活などという考えは微塵も浮かんだことがなかったという。ある日、アカデミーの部屋を通

りかかったイワン・ドミトリエヴィチは、ある「休憩室」で、アカデミーの課程を修了した者の中から、函館にある大使館付属教会の主任司祭として日本へ赴任する者を募集する公告を目にした。カサトキンの仲間数名は、すでに司祭として日本へ行く意向を表明していた。かつてゴロヴニンの日本に関する回想録に深く感銘を受けていたとはいえ、この招待状は若者にさほど強い印象を与えなかった。彼は平然と徹夜礼拝へと向かった。そして、礼拝の最中、彼は突然、日本へ行くべきだと決心した。徹夜祷から戻ると、彼は深い動揺を抱えながら、神学校の学長であるネクタリウス大主教のもとへ向かい、日本へ行きたいという希望を伝えた。ただし、既婚の司祭としてではなく、修道士として行きたいと。アカデミーの学長は、この若者の志に深く共感し、その意向を大主教に報告した。あっという間に、イワン・ドミトリエヴィチ・カサトキンの運命は決まった。

1860年6月21日、青年はニコライという名で修道に剃髪した。6月29日、聖使徒ペトロとパウロの祝日に、彼は司祭助手に叙階され、翌日、十二使徒の祝日（アカデミーの教会の守護聖人の祝日）には、修道司祭に叙階された。この青年を修道士として剃髪したネクタリオス司教は、彼にニコライという名を授け、こう言った。「あなたは修道院の中で修道生活を送るべきではない。お前は故郷そのものを離れ、遠く離れた異教の地へ赴き、主に仕えなければならない。修道者の十字架とともに、旅人の杖を手にとれ。修道生活の業に加え、使徒的な労苦がお前に待ち受けているのだ。」

6月末、修道士ニコライはサンクトペテルブルクを離れ、村で家族と3日間を過ごした。家族に別れを告げると、彼は遠い旅路へと出発した。彼は、生涯大切に保管していたスモレンスクの聖母イコンを携えていた⁴。

日本への道のりは長く、困難を極めた。ニコライ修道士は冬をニコラエフスク・ナ・アムールで過ごした。そこで彼は、シベリアの啓蒙者である聖イノケンティ（当時はカムチャツカ主教）と出会った。聖インノケンティは、今後の任務に向けて彼に祝福を与え、日本語の勉強に本格的に取り組むよう助言した。修道士の粗末な修道服を見て、インノケンティ司教は上質なベルベットを購入し、自らそれを裁断してニコライ神父のために修道服を仕立てた。また、クリミア戦争への参加により授与された胸掛け用の青銅の十字架を、ニコライ神父に授けた。

1861年6月14日（2日）、修道士ニコライは軍用輸送船「アムール」号で日本の函館港に到着した。

函館

函館初のロシア領事には、多くの点で傑出した人物であったヨシフ・アントノヴィチ・ゴシュケヴィチ（1814-1875）が任命された⁵。彼は1858年9月の第30日頃に、家族、海軍将校、医師、聖職者（後者は病気のため、領事館設立の年に本国へ帰国した）、4人の使用人、2人の女中を伴って函館に到着した。

修道士ニコライが日本に到着する前から、ロシア領事館はすでに函館にキリスト復活教会を建設していた（その後、函館大火の際にこの教会は焼失し、その跡地に石造りの教会が建てられた）。この教会の建設と奉献を行ったのは、ヴァシリー・マホフ神父であった。しかし、病気のため、彼はわずか1年後に日本を離れ、祖国へ帰国せざるを得なくなった。その後、I・A・ゴシュケヴィチは、最高レベルの神学教育を受けた司祭を派遣するよう、聖会に要請した。

この頃、日本人の外国人に対する態度は極めて敵対的であったことに留意すべきである。西欧諸国によって押し付けられた「平和」条約は、外国人を「野蛮人」と見なし、その完全な追放を主張していた侍たちに極度の不満を引き起こしていた。それに伴い、開国と外国人の流入は、時に公然たる暴力として現れるほどの極端な排外主義の台頭を助長した。実際、1861年の上半期には6人の外国人が殺害された。日本人がほぼ最大の敵と見なしていたキリスト教徒に対する武装襲撃が、京都、江戸、横浜で発生した。函館ではこの種の事件はなかったが、日本人はロシア人に対しても、他の外国人と同じくらい、あるいはそれ以上に強い疑念を抱いていた。混乱が深まるにつれ、反幕府の気運も高まっていった。1862年には本格的な内戦が勃発し、1868年に幕府将軍の退陣と帝国政府の樹

立をもって終結した。運命のいたずらで、幕府勢力の最後の砦となったのは、榎本艦隊が占拠していた函館であった。しかし、この艦隊は1869年5月にはすでに帝国軍によって撃破されていた。天皇は江戸へ移り住み、江戸はその後、東京、すなわち「東の都」と呼ばれるようになった。明治時代——「啓蒙政治」の時代——が始まった。

「この最初の数年間、私がどれほどの苦難を耐え忍ばなければならなかったか、主のみがご存知です。三つの敵——世界、肉、そして悪魔——が総力を挙げて私に立ち向かい、最初の暗く狭い場所で私を陥れようと、私の後を執拗に追いかけてきました。そして、それらの誘惑は、一見すると極めて正当なものに見えました。「私だって、他の人間と同じように、家庭生活を送るために造られたのではないのか？ この世において、神と隣人に輝かしく仕えることはできないのか？ 結局のところ、今のロシアは、日本よりも私を必要としているのではないか？」などといった具合だ。何千もの囁きが耳元で唸り続け、それは毎日、毎時間、現実の世界でも 夢の中でも、自宅の独房でも、教会での祈りの最中でも続く。これらすべてに打ち勝つには、多大な精神力と、宗教的感性の深い深化が必要だ。」

説教など到底考えられなかった。というのも、「当時の日本人は外国人を獣のように見なし、キリスト教を、極悪非道な悪党や魔術師だけが属しうる邪悪な宗派として見ていた」からである。さらに、この若い宣教師は日本語を知らず、日本の宗教や歴史、文化についても無知だった。「日本に来て、私は力の及ぶ限り、現地の言語を学び始めた。この野蛮な言語——自然の日本語と中国語の二つが互いに混ざり合っているものの、決して一つに融合してはいないため、間違いなく世界で最も難しい言語である——をしっかりと理解できるようになるまで、多くの時間と労力を費やした。

<...> 何とかしてようやく日本語を話せるようになり、学術的な原著や翻訳作品に使われる、最も単純で簡単な書き方を身につけた。」当初、彼に日本語を教えたのは、函館知事の通訳だった。その通訳の勧めにより、修道士ニコライは、類稀な博識で知られる木村謙斎の私塾に通うようになった。そこで彼は、日本の歴史や文学、さらには仏教、神道、儒教の学習にも取り組んだ。木村謙斎のほか、佐賀玄や新島四目も彼の師であった。書斎での学習には8年を費やした。この期間のほぼ全期間、彼は1日14時間もの間、勉学に励んだ。その頃、彼は文芸の集まりや神社の参拝にも通うようになった。D.M. ポズドネエフ6は次のように記している。「日本文学を絶えず読み、日本人との交流を絶やさなかったことで、ニコライ神父は日本語の口語および文語において驚くべき知識を身につけた。彼には強い外国訛りがあったが、それにもかかわらず、老若男女を問わずすべての日本人から理解されていた。豊富な語彙と流暢な文の組み立てが、彼の言葉に力を与え、すべての日本人を感嘆させた……その言葉は簡潔で、表現は極めて意外なものだったが、非常に鮮やかで力強かった。」

「私はまず、日本の歴史、宗教、そして日本国民の精神を徹底的に研究し、福音の宣教によってこの国を啓蒙するという希望が、どの程度実現可能かを把握しようと努めた。そして、この国について知れば知るほど、福音の言葉が力強く響き渡り、帝国の隅々まで瞬く間に広まっていく時が、もうすぐそこまで来ていると確信するようになった。」

最初の成果

正教会に改宗した最初の日本人は、土佐藩の元武士であり、函館の古い神社の神官であった沢部拓馬（1835-1913）であった。沢辺は、日本からすべての外国人を追放することを目的とした秘

密結社のメンバーであり、卓越した剣士としても知られていた。彼は剣術の師範として、ロシア領事イ・A・ゴシュケヴィッチの息子のもとを訪れていた。かつて彼は日本各地を放浪し、剣術の指導で生計を立てていた。函館に来てからは、神社の神官の娘と結婚し、その姓である「沢辺」を名乗っただけでなく、義父から受け継いだ神官の位と職務も引き継いだ。

「サワベは、神道の世界で平穏で安らかな生活を送っていた。町で最も古い神社の神官として、彼は人々から尊敬され、かなりの収入を得て、満足と幸福だけを知っていた。家族には、美しい若い妻と幼い息子、そして妻の母親がいた。彼は自分の祖国と先祖の信仰を誇りに思っており、それゆえに外国人を軽蔑し、彼らの信仰を憎んでいたが、その信仰については全く根拠のない認識しか持っていなかった。」

1864年に起きた、この厳格な日本人の改宗に関する詳細な記述は、A・プラトノワの著書に記されている。

サワベは領事館で修道士ニコライと度々顔を合わせ、いつも彼を激しい憎悪の眼差しで見つめていたため、ある時、ニコライは我慢できずにこう尋ねた。

「なぜそんなに私に腹を立てているのか？」すると、極めて明確な答えが返ってきた。
「お前たち外国人は、全員殺すべきだ。お前たちは我々の土地を覗き見に来た。そしてお前は、その説教で日本を最も害するだろう。」
「あなたは、私の教えをすでに知っているのですか？」
「いいえ」と、日本人は戸惑った様子で答えた。

「相手の話を聞かずに、ましてや非難するのは公平と言えるだろうか？ 知らないことを誹謗するのは公平だろうか？ まずは話を聞いて理解してから、判断すべきだ。もし私の教えが良くないものなら、その時にここから追い出せばいい。そうすれば、君は公平だと言えるだろう。」
「さあ、話してください！」

修道士ニコライの言葉は、その侍を深く感動させた。彼は、修道士と再び会い、会話を続ける許可を求めた。しばらくして、ニコライ神父はすでにイシドール都主教に次のように書き送っていた。「ある古代宗教の司祭が、私たちの信仰を学ぶために私のところへ通っている。もし彼が信仰を冷めさせたり、（キリスト教への改宗による死刑で）命を落としたりしなければ、彼には大きな期待が持てるだろう。」

1865年4月20日付の手紙の中で、修道司祭ニコライは次のように記している。「その司祭は、私から洗礼を受けることを心待ちにしている。彼は教養があり、聡明で、雄弁であり、全身全霊でキリスト教に献身している。今や彼の人生の唯一の目的は、キリスト教の普及を通じて祖国に奉仕することであり、私は、彼がその目的のために何かを成し遂げる前に、冷静さを失ってしまうのではないかと懸念し、彼の願いを絶えず制止せざるを得ない。」

サヴァベの置かれた状況の危険性は、彼の次の話からうかがえる。「この本〔福音書〕を人目につくように読むことはできなかったが、読みたいという気持ちはあった。そこで、私は自分のミヤ〔すなわち異教の神社〕で儀式を行っている最中に、こっそり読むことを思いついた。異教の儀式書のかわりに、の福音書を目の前に置き、いつもの太鼓を叩きながら読んでいたのだ。私が外国の『異端』を読んでいるなど、誰も思いもよらなかった。」

まもなく、佐波部は友人の医師・堺篤則を修道士ニコライのもとへ連れて行った。しばらくして、3人目の友人である医師・浦野も加わった。日本人たちは自主的に教理問答の集まりを行うようになり、1868年の春には、洗礼を受ける用意のある者がすでに20人にも達していた。

その頃、長崎では再びカトリック信者への迫害が始まり、函館には新しい役人が赴任してきた。1868年4月、修道士ニコライは自身の書斎で3人の友人を密かに洗礼し、その後彼らは函館を去った。その3人とは、パウロ・サワベ、ヨハネ・サカイ、ヤコブ・ウラノであった。まさにその時、明治時代が始まる5ヶ月前に、日本正教会が誕生したのである⁷。

佐波部には直ちに過酷な試練が降りかかった。彼の妻は正気を失い、数ヶ月後、発作の最中に自宅を焼き払ってしまった。佐波部は結局、身を寄せる場所を見つけることができず、まもなく函館に戻った。今や彼には、生計を立てる手段だけでなく、住む場所さえもなかった。その同じ1868年、彼は牢獄に投獄された。聖ニコライは次のように記している。「私の目の前で、神の恵みによって人が新しい命へと生まれ変わる過程が繰り広げられていたが、私の視界の外では、すでに別の過程——新生したパウロの試練と力の鍛錬の過程——が始まっていた。」彼の8歳の息子は、世襲の権利により、同じ偶像崇拝の神殿の司祭となり、それによって自分自身と病の母を養う手段を得た。その後、パヴェル・サヴァベは、自分の息子もキリスト教徒となるのを見ることができ、慰めを得た。試練はパヴェルの熱意をさらに強めるだけであり、1875年、彼は司祭に叙階された。

「私たちの間で二人目のキリスト教徒となったのは、**坂井ヨハネ氏**でした。彼は地元の医師であり、キリスト教に改宗した佐波部氏の親しい友人でした。佐波部氏は友人を同じ道へと導こうと

努めました。坂井氏は弁論に長けており、彼を説得するのは困難でした。そこで、サワベ氏は彼を私のところに頻繁に招くようになり、私たち二人で彼を説得しました。ついにサカイ氏も洗礼を受け、さらには司祭の聖職に叙階されましたが、その聖職に就いて間もなく、病気のため亡くなりました。三番目のキリスト教徒は、同じく元医師の浦野ヤコブ氏であった。彼には、現在の小野ヨハネ神父によって函館で聖なる洗礼が授けられ、その後、他にも数名が洗礼を受けた。しかし、これらの人物こそが、我々の初期のキリスト教徒の中でも中心的な存在であった。その後、聖洗礼を受ける者の数はますます増え、日本におけるキリスト教信仰の体系的な普及の可能性が見えてきた。まさにこの目的のため、そのための公式な権限を得るべく、私は一時ロシアへ赴き、そこで聖シノドから許可と祝福を得て、再び日本へ戻った。私の到着後まもなく、佐波部氏が訪ねてきて、その際、私が日本を離れている間に、坂谷氏が奇妙な振る舞いを見せていたことを教えてくれた。坂谷氏は、自分の仕事からできるだけ多くの利益を得ることばかりに気を取られていたのに対し、他のキリスト教徒たちは、それとは対照的に、すべてを兄弟たちと分かち合おうとしていたというのである。これを聞いて、私は坂井氏を非難しようとしたが、彼がやってくると、事態はすぐに明らかになった。私の元を訪れた坂井氏は、自ら集めた100円（約200ルーブル）を提示し、これを教会の活動に充てたいと申し出た。こうして、一見奇妙に見えた坂井氏の振る舞いに対する佐波部氏の戸惑いも解消されたのである。

もう一つ、一見奇妙に見える同様の出来事が、トミ・ペトル氏に起こった。ある時、誰もが彼がどこかに突然姿を消したことに気づいた。彼がどこへ隠れたのか、誰も知らなかった。私は妻に尋ねたが、彼女も知らなかった。とはいえ、彼女の顔には悲しみも、ましてや特別な心配の色さえ見

られなかった。これらすべては非常に不可解であり、かなり長い間続いた。しかし、それから11日後のある晩、11時頃、トミ・ペトル氏がサカヤ氏に付き添われて私のところへ現れた。見ると、信じられないほど痩せ細り、色つやが一変した顔からは骨が浮き出ており、見るに忍びないほどだった。私が「どこにいたのか」「なぜこれほどまでに痩せ細ってしまったのか」と尋ねると、彼は、この間ずっと、睡眠と食事を断ち、自分自身が最近授かった真理の光によって、異教徒の兄弟たちが一日も早く啓蒙されるよう祈りを捧げていたのだと答えた。これらすべてを聞いて、私は、信仰に対するこれほど感動的な熱烈な忠誠心の表れに深く驚かされた。しかし、それでも私は彼に、今後は教会の規定に従ってそのような行いを行うべきだと指摘せざるを得なかった。そうでなければ、自身の健康に深刻な害を及ぼす恐れがあるからだ。」

ロシアからの支援

1869年の終わり、修道士ニコライは休暇を申請し、日本におけるロシアの宣教団開設の許可を聖シノドに請願するため、ロシアへと向かった。

修道司祭ニコライは1870年2月にロシアに到着した。彼の請願は1870年4月6日に認められ、アレクサンドル2世は、日本におけるロシア宣教団の設立に関する聖シノドの決定を最高権威をもって承認した。この宣教団は、宣教団長、3人の宣教修道司祭、および助祭で構成されることとなった。予定経費の半分は国庫が負担し、残りの半分は宗教省の印刷資本から充当された。宣教団には、年間6,000ルーブルと一時金として10,000ルーブルが計上された。宣教拠点は東京、京都、長崎、函館に置かれた。宣教団の長には、アルヒマンドリトの位に叙された修道士ニコライが任命された。宣教団

はカムチャツカ主教区の管轄下に置かれた。宣教師の職務は、修道士ニコライが提出し、聖会によって承認された「宣教団のための指針」に明記されていた。

アルヒマンドリト・ニコライ自身は1879年に次のように記している。「正教会の日本における特徴として、わずか8年の歴史しか持たず、その間2人の宣教師しかおらず、明確な物質的手段も一切ない正教会の宣教団が、キリスト教徒の数において、カトリックおよびすべてのプロテスタントの宣教団を合わせた数よりもすでに2倍も多かったという事実が挙げられる。」

日本へ出発する前、ニコライ大修道院長は老いた父と再会することができた。

彼は1871年3月に函館に戻った。彼の不在中も福音の宣教は続けられていた。その年の終わり、ニコライ大修道院長は仙台で11人に洗礼を授けた。

1872年、キエフ神学アカデミーの候補生である修道士アナトリー（ティハイ）が函館に到着した^{*}。ニコライ大修道院長は彼について次のように評した。「これ以上の助手は望み得ない！」彼は函館の教会をアナトリー神父に任せ、1872年2月4日に東京へ移った。

聖書およびその他の必要書籍の翻訳

聖人が函館の頃から着手していた主な事業は、聖書および礼拝用書籍の日本語への翻訳であった。1869年の時点で、聖ニコライは次のように記していた。「これまで述べたことすべてから、少なくとも近い将来において、日本には『収穫は多い』という結論を導き出せるようだ。しかし、私自身の極めて個人的な活動を除けば、我々側には活動する者が一人もいない…… たとえ私がこれまでと同じ方向で活動を続けたとしても、ここでの一人の力の及ぶ範囲は、海の一滴に等しい。新約聖書

の翻訳一つだけでも、それを正確に行うならば（そうでない方法などあり得るだろうか？）、少なくともあと2年は専念して取り組まなければならない。さらに、旧約聖書の翻訳も必要です。それに加え、たとえごく小さなキリスト教会であっても、日本語による礼拝を行うことは絶対に不可欠です。そして、聖書史、教会史、典礼学、神学といったその他の書籍はどうでしょうか？ これらもすべて、差し迫った必要性のある課題です。これらすべて、そしてその他類似のものは「日本語」に翻訳されなければならないが、その日本語が、外国人が自国語で書くのと同じくらい、あるいはその半分ほどでも容易かつ迅速に書けるようになるかどうかは、まだ未知数である。」ずっと後になって、彼は翻訳作業に「宣教の真髄のすべてが込められている」と記している。現在、どの国であれ、宣教活動は口頭による説教のみに限定されることはできない。フランシスコ・ザビエルが鈴を鳴らして街を駆け回り、その方法で聴衆を集めていた時代は過ぎ去った。一方、日本では、人々の読書への愛好心と印刷物への敬意の高まりを踏まえ、信者や伝道対象者には、何よりもまず、彼らの母国語で書かれ、必ずや文体が優れ、入念かつ美しく、そして安価に刊行された本を渡す必要がある。特に重要なのは、カトリックやプロテスタントとの信仰上の相違点を明らかにした書籍である。」

11. 教会の設計は、サンクトペテルブルクの建築家ミハイル・アレフィエヴィチ・シュルポフによるものである。1923年の地震で失われたイコノスタスは、同じくサンクトペテルブルクのイコン画家ヴァシリイ・マカロヴィチ・ポシエホノフによって描かれていた。教会の建設のための寄付はロシア全土から寄せられた。モスクワだけで20万ルーブルが寄付され、これは工事総費用の40パーセントに相当した。

12. ロシア皇太子の日本訪問もこの出来事に合わせて行われたが、大津での事件の後、皇太子は日本を去った。

函館では、通訳がいなかったため、礼拝は教会スラヴ語で行われ、日本語で歌われたり読まれたりしたのは、「主よ、憐れみたまえ」、「聖なる神よ」、「使徒信条」、「主の祈り」のみであった。「主よ、憐れみたまえ」という祈りの翻訳にあたって、「憐れみたまえ」という言葉をどう訳すべきかという疑問が生じた。この言葉は、しばしば犯罪者への赦しとして受け取られるからだ。ニコライ司教は次のように述べた。「私たちには、神との間にそのような関係はない。我々は『アヴァレマ』という語を採用する。それは、母親が子供を『慈しむ』、すなわち古ロシア語本来の意義における『憐れむ』という意味である。」 同じ函館で、聖ニコライは中国語からの聖書翻訳に着手したが、まもなく中国語訳の不備を痛感し、ロシア語訳よりも正確であると考えた教会スラヴ語からの新約聖書の翻訳へと移行した。各節は、ウルガタ、セプトゥアギンタ、および英語訳と照合された。難解な箇所では、聖ニコラオスは聖ヨハネ・クロソストモスの解釈を参考にしていた。4～5時間の作業で、彼が翻訳できたのはせいぜい15節程度であった。聖人が福音書と使徒書簡（その最初の版）の翻訳作業を終えると、これらも日本語で読まれるようになった。とりわけ函館では、使徒パウロのガラテヤ人への手紙、エフェソ人への手紙、フィリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、およびローマ人への手紙の半分が翻訳された。また同時期に、（中国語から）簡略な祈祷書、洗礼式および異教徒の改宗式、聖ディミトリ・ロストフスキーの『正教の信仰告白』、求道者向けの教理問答、旧約聖書の要約、ミハイル主教の『解説付き福音書』、およびプラトン大主教の『道徳神学』が翻訳された。

13. 1923年の広州地震の際、ドームが崩落し、大聖堂の装飾品やイコノスタスはすべて火災で焼失した。3万冊に及ぶ宣教団の図書館も焼失した。猛烈な熱で溶けてしまった鐘さえも失われた。 1923年10月20日の緊急総会において、大聖堂の再建が決定された。1929年12月15日、再建後の大聖堂は奉献式が行われた。 大聖堂の再建を担当した日本の建築家、岡田真一は、建物の全体的なプロポーシオンを変えることはしなかったが、仏教寺院の建築様式から着想を得て、鳥が舞い上がる様子や天へと舞い上がることを象徴する、ごくわずかな曲線をドームに施した。

東京に移った聖ニコライは、まず『オクトイヒ』を翻訳し、続いて『彩期・斎期トリオディ』を翻訳すると同時に、福音書の新たな翻訳にも取り組んだ。旧約聖書からは、年間の礼拝サイクルを執り行うために必要なすべての部分が彼によって翻訳された。 彼はカトリックやプロテスタントによる、それほど厳密ではない翻訳を信用しておらず、それらに従ったり、無意識のうちに何かを借用したりすることを恐れて、あえてそれらを読まないようにさえ努めた。聖人の念願は、聖書全巻の翻訳であった。1910年、彼は自身の計算によれば、この大業を完遂するにはあと5年が必要だと語っていた。

「福音書や礼拝の翻訳を大衆の理解レベルに合わせて下げるのではなく、逆に、信者たちが福音書や礼拝のテキストを理解できるレベルまで高められるべきである。 福音書において俗語は許されない。もし、完全に同一の漢字や表現が二つあり、その両方が日本人の耳や目には等しく高貴に聞こえるのであれば、私はもちろん 広く普及している方を優先するが、無知には決して譲歩せず、翻訳の正確さに関しては、 たとえ日本でほとんど知られていない漢字を使わなければならないとしても、わずかな妥協も許さない。 私自身、時折、私の翻訳を理解するために日本人には多大な努力が必要だと感じています。しかし、これは彼らにとって正教会そのものが新しいものであることに、大きく起因しているのです……」

翻訳にあたっての一連の困難や危険は、多くの漢字が何世紀にもわたって仏教徒や神道信者によって使用されてきたことにも起因していた。これにより、それらの漢字には極めて明確な意味合いが帯びており、正教会の文脈でそれらを使用することは不可能か、あるいはリスクを伴うものとなっていた¹⁴。いくつかのケースでは、聖師は特定の聖句や概念の翻訳を各教区に送り、聖職者や信徒に対し、それについて意見を述べるよう要請した。

30年間にわたり、毎日午後6時きっかりに、主教の私室には、彼の常任の翻訳担当であるパヴェル・ナカイが入ってきた。彼は教養に富み、並外れて勤勉で、正教の信仰に全身全霊を捧げていた人物であった。彼は主教の隣の低いスツールに座り、主教の口述に従って書き始めた。作業は通常4時間続き、夜10時に終了した。

「私の目の前には、スラブ語とギリシャ語の礼拝テキストが置かれており、その正しい理解を助ける参考書も手元に用意されている。私の助手の手元には中国語と日本語の辞書や文法書があり、また私たちの目の前には、北京の宣教団から入手した中国語の礼拝テキストもある。スラブ語のテキストを見ながらギリシャ語のテキストと照らし合わせ、意味を文字通り正確に表現しよう心がけながら翻訳を口述し、同僚は中国語の漢字と日本語のアルファベットを混ぜて書き留めている。この段階での翻訳の難しさは、日本語の文法が私たちの文法とは正反対であるという点にあります。つまり、日本語では主語を文頭に置かなければならず、主語と述語の間に翻訳文に含まれるすべての要素を収めなければなりません。たとえどれほど多くの従属節や導入節があっても、それらはすべて主述語の前に配置されなければなりません。各従属節や導入節においても、同様の構成が求められる。

歌や祈りが口述され、その各部分の構文上の関係が確定すると、次は執筆した文章の仕上げ作業が始まる。その際、私の最大の関心事は、テキストの意味から一寸たりとも逸脱させないことである。一方、私の同僚は、文法や文体の構成の正確さと優雅さを確保するために、私と同じくらい細心の注意を払って尽力している。この作業が最も困難で、骨の折れる部分である。ここで特に中国・日本の学識が求められる。第一に、多くの同義の漢字の中から最も一般的で分かりやすいものを選ぶために、各漢字の意味を明確に把握する必要がある。第二に、その漢字に中国語の発音をそのまま残すか、それとも日本語の発音を与えるかを検討する必要がある。というのも、漢字が中国から日本へ伝わる際、中国語の単一の発音を持ち込み、それが今日に至るまで残っており、その全容を把握できるのは深遠な学者だけであるが、段階的に簡略化され、下層へと浸透していく中で、民衆の最下層にまで相当程度浸透しているからである；一方で、ほぼすべての漢字は日本語に翻訳されており、独自の日本語読みを持っている。どちらに従うべきか？一見すると、純粋な日本語にこだわるべきと思われるが、教育を受けていない人々にとってさえ、漢字の日本語読みが中国語の読みよりも理解しにくい（ ）というケースが極めて頻繁に見られる。第三に、漢字に日本語のローマ字表記を付けないままにするか、あるいは漢字の難解さや曖昧さゆえに、どの程度までそれを付加すべきかについても検討する必要がある。要するに、翻訳においてどの言語を採用すべきかを決定しなければならない。翻訳対象の重要性を考慮すると、最も高尚な学術言語が好ましい。この言語は、漢字の数やその発音に制約がなく、いかなる転写も必要としない。しかし、この言語は中程度の学識を持つ人々にとっては扱いにくく、学識の浅い人々にとっては全く理解できないだろう。私たちが翻訳するものはすべての人に理解可能でなければならず、それこそがその最大の価値であるべきだという考えから、

大衆の言語、すなわち民衆の言語に惹かれる。しかし、そうすれば私たちの翻訳は下品なものとなり、庶民以外のすべての人々から即座に軽んじられてしまうだろう。我々は中庸な言葉遣いを採用することにした。この方針に従うよう努めているが、その基準が曖昧で境界線が不明確であるため、ここには尽きることのない議論の余地が広がっている。その中で私はあらゆる手段を尽くして「最大限の普遍的な理解可能性」を主張し、一方、私の共同研究者は「下品な表現」を避け、言葉の優雅さを保つことに努めている。ようやくこれらすべての困難が解消され、翻訳文が確定し、全巻の翻訳が完了すると、私たちは再び原文と丹念に照合しながら校閲を行い、全巻を通じて、同じ原文の単語や表現に対して、同じ翻訳漢字と読み方が用いられているかを確認する。」

神学校の元学生たちによって、ロシアの神学書だけでなく、ロシアの文学作品の翻訳にも取り組む翻訳者チームが結成された（当初、翻訳部門にはロシアで神学教育を受けた者だけが所属していたが、その後、日本人たちも加わるようになった）。その中には、神学校の学長イワン・セヌマとその妻アンナ・ルキニチナ・セヌマ、ロシアで10年間を過ごした神学校の哲学・神学教授小西正太郎（後にプロテスタントに転向）、著名な翻訳家であり学者である登り正武らがいた。聖人は次のように記している。「翻訳し、読んでほしい。ロシア文学を知り、プーシキン、レルモントフ、トルストイ家、ドストエフスキーを知れば、ロシアを愛さずにはいられなくなるだろう。」

戦争

1900年以降、反ロシア感情が再び高まり、それが教会に対する態度にも影響を及ぼさざるを得なかった。D・M・ポズドネエフは、新聞『日本』からの特徴的な一節を引用している。「正教会は、日本の頭上に呪いを浴びせ、その敗北を祈る悪意に満ちた場所である。同教会は常に、ロシアに仕えるスパイたちの中心的な拠点であった。日本人にとって憎悪の対象となるのは、街全体を見下ろすようにそびえ立ち、あたかも皇居そのものに軽蔑の眼差しを向けているかのようなロシア正教会のドームであり、毎週日曜日の朝、その騒々しい音で住民の安らかな眠りを妨げる教会の鐘である。」

1902年に日本と英国の間で同盟が締結された後、日本とロシアの戦争は避けられないことが明らかになった。1903年の主教会議で、ニコライ主教は、日本の正教徒たちを極めて動揺させた「ロシアに対する戦争に参加すべきか」という問いに答えることを余儀なくされた。彼は、信徒たちは国民全体と共に祖国に対する義務を果たさなければならないと答えた。戦争が始まった場合、彼らはロシアを敵として扱わなければならないが、「敵と戦うことは、敵を憎むのではなく、ただ祖国を守ることに他ならない」と述べた。

1904年2月5日、日本はロシアとの外交関係を断絶した。当時宣教所で働いていた2人の聖職者は帰国した。日本教会の聖職者や信徒たちは、自国の司教に対し、日本に残留するよう懇願した。ニコライ司教は、すでに神の前で、大聖堂に隣接する小さなアパートに留まる決意を固めていると答えた。「私は、宣戦布告が当教会の活動に何ら変化をもたらさないことを願っている。教理指導者たちは救い主の福音を宣べ伝え続け、生徒たちは宣教学校の授業を受け続け、私自身は礼拝用書物の翻訳に全身全霊を捧げるつもりだ……」

今日も例年通り大聖堂で礼拝を執り行いますが、これからは当教会の公の礼拝には参加いたしません……これまで私は、大日本帝国の繁栄と平和のために祈ってきました。しかし今や、日本と私の祖国との間に宣戦布告がなされた以上、私はロシアの臣民として、日本が私の祖国に勝利することを祈ることはできません。私もまた、祖国に対する義務を負っており、それゆえ、皆さんが自国に対する義務を果たす姿を見ることができれば、この上ない喜びです。」ロシアとの開戦宣言に動揺した日本正教会のすべての教区には、「回状」が送付された。その中で司教は、日本のキリスト教徒が忠実な臣民としての義務を果たすことを祝福しつつ、次のように呼びかけた。「命を惜しまず戦場へ赴かねばならない者は、敵への憎しみからではなく、同胞への愛ゆえに戦いなさい……祖国への愛は聖なる感情である……しかし、地上の祖国以外にも、私たちには天の祖国がある……この私たちの祖国とは教会であり、私たちは皆その一員であり、その教会において、天の父の子供たちは真に一つの家族を成している……そして、私たち一人ひとりに課せられた、天の祖国に対する義務を共に果たしていこう……同時に、主が乱された平和を一日も早く回復してくださるよう、熱心に祈り続けよう……」

聖師はロシアとのあらゆる書簡のやり取りを絶ち、翻訳作業に全身全霊を捧げました。

日本へロシア人捕虜が到着し始めた際（その総数は7万3千人に達した）、聖ニコライは日本の政府の同意を得て、「戦争捕虜精神的慰安協会」を設立した。捕虜たちの霊的ケアを行うため、ロシア語を話す5人の司祭が選ばれた。日本に到着した捕虜一人ひとりに、日本正教会は銀の十字架を授けて祝福した。捕虜たちにはイコンや書籍も支給された。主教自身も、彼らに何度も手紙を送った。

戦時中のニコライ主教の活動は、日本だけでなくロシアでも極めて高く評価された。ニコライ2世皇帝は1905年末、ニコライ主教に次のように書き送っている。「...あなたは、世俗の支配やあらゆる部族間の敵意とは無縁であるキリストの正教会が、あらゆる部族と言語を等しく包み込むことを、万人の前で示されました。 <...> あなたは、キリストの戒めに従い、あなたに託された羊の群れを見捨てず、愛と信仰の恵みが、あなたに戦いの炎のような 試練に耐え抜き、戦いの渦中にあっても、あなたの労苦によって築かれた教会において、平和と信仰と祈りを保つ力を与えてくれました。」

聖ニコライが戦時中に示した類まれな配慮と英知は、戦争終結後、日本社会における彼の威信をさらに高めました。この聖人の威信は、戦争による心理的後遺症の迅速な克服に寄与し、1917年まで続いた日露関係の親密化への道を切り開きました。

戦後は新たな試練をもたらした。ロシアから日本の正教会宣教団への寄付の流入は、ほぼ途絶えてしまった。その結果、宣教団は30人の教理指導者を解雇し、教理指導者養成学校を閉鎖せざるを得なくなった。

1908年、京都教区にセルギイ（ティホミロフ）主教¹⁵が着任した。彼はすぐに日本語を習得し、日本全国を巡回しながら活発な宣教活動に取り組んだ。彼の登場は、ニコライ大司教を大いに慰めた。大司教は次のように記している。「今や、宣教の事業が信頼できる手に委ねられているという確信を持って、安らかに死を迎えることができる」また、「.....私たちには、彼と同じくらい熱心な宣教師があと二人必要だ。そのことを神に祈り、ロシアに目を向けている。」

晩年と死

1911年7月、ニコライ神父の日本での奉仕50周年が盛大に祝われた。セルギイ（ティホミロフ）司教は次のように記している。「日本各地から司祭や教理指導者たちが集まり始めた…… 彼らだけでも120人以上おり、地方の多くの信徒たちも熱心に駆けつけた。そして、75歳の長老は毎日、早朝から夜遅くまで自室に座り、司祭たちからの各教区の状況に関する報告や、教理指導者たちによる担当地域での説教についての話を聞き、あるいは遠くからやって来たおばあさんたちと親しげに会話を交わしていた。総会が始まった……そこでは、やるべきことや騒ぎが尽きない。記念式典…… 一日の中で、聖体礼儀、祈祷会、ホテルでの来賓を交えた昼食会、音楽の夕べ。私たち若者たちはこれで一日の務めを終えた。しかし、75歳の長老は、スルガダイ学校の元女子生徒たちの集まりに招待されていた。そして、そこへ向かった。そして、聞くというよりは、むしろ語り、教えを説いていた。司教様が、どうしてそんな一日を乗り切れたのか、ただただ驚かざるを得なかった……しかも、明日も休息の予感はなかった。4時間にも及ぶ長い祝辞の朗読。そして夕方には、宣教所の庭で、数百人のキリスト教徒を招いての夕食会……しかし、私としては、あの最後の瞬間さえなければ、故人にとってもこの日は比較的順調に過ぎ去ったのではないかと思う…… 演説に奮い立たされた司教は立ち上がり、並外れたエネルギーでふと頭を上げ、夕食をとっていた数百人のキリスト教徒で埋め尽くされた広大な広場全体に響き渡る声で、その宗教的寛容さのおかげでキリスト教が広まるだけでなく、その宗教的寛容さのおかげで、キリスト教は広まるだけでなく、庇護とまではいかないまでも、少なくとも完全な安寧を享受することができたのである。司教の並外れた興奮ぶり、赤みを帯びたその顔を見なければならなかった。大司教が真っ先に賛美歌を歌い始めただけでなく、最後まで歌い通し

た様子を耳にすべきだった……すでに若くはない 体の中に燃える、あの若々しい情熱を目にするべきだった。そうすれば、大司教の傷ついた心にとって、この瞬間が決して無意味に過ぎ去ることはなかったことが、誰の目にも明らかだっただろう……」

この数日の精神的緊張と過労が、主教が患っていた心臓喘息を悪化させた。彼の体力は急速に衰えていった。

逝去の直前に、主教はセルギイ司教にこう語った。「……我々の役割は、鋤（すき）に過ぎない。農夫が耕し終わると、鋤は使い古される。彼はそれを捨ててしまう。私も使い古された。そして、私も捨てられるだろう。新しい鋤が耕し始めるのだ。だから、よく見よ、耕せ！ 誠実に耕せ！ たゆまず耕せ！ 神の御業が成長するように！ それでもやはり、神がまさにあなたを使って耕してくださったというのは嬉しいことだ。つまり、あなたも錆びついてはいなかったということだ。つまり、神の畑での働きを通じて、あなたの魂も幾分清められたのだ。そのことについて、私たちは常に神に感謝しよう。」

ニコライ大司教が最後に礼拝を執り行ったのは、1912年のキリスト降誕祭の初日であった。数日後、彼は築地の聖ルカ病院に入院した。しかし、2月5日、未解決の業務を急いで片づけようとしていた大主教は、鶴ヶ台へ戻すよう強く求め、再び翻訳作業に取り組み始めた。2月13日、彼は宣教活動の状況について、聖会への最後の報告書を作成した。

2月15日、主教は、通常は隣の部屋で行われていたが医師の勧告により中止されていた聖歌隊の練習を再開するよう求め、また、彼が愛した「バビロンの川辺で」を演奏するよう依頼した。

夜になると錯乱状態が始まり、その最中に臨終の司教は何度か「復活」という言葉を発した。2月16日、8時15分、大聖堂の鐘が鳴り響き、聖ニコライの死を告げた。

15. セルギイ（ティホミロフ）大主教は、1945年4月に「ロシアのスパイ」として逮捕された。同年8月10日に死去した。

セルギイ司教は次のように記している。「主教はもはやうめき声を上げてはいない。看護師による注射も行われていない。ただ、キリストの御言葉の静かな朗読だけが、死の神秘を破っている。その御言葉への奉仕に、大主教は自らの聖なる生涯のすべてを捧げたのだ。つい昨日まで、病床で生き生きと会話を交わし、10年間の活動計画を立てていたその姿が、今やあまりにも明白に浮かび上がる。<...>

大主教閣下の遺体は十字架教会に安置されていた……2月4日（旧暦）の土曜日、朝と晩の徹夜祈禱の後、日曜日には聖体礼儀の後と夕方、2月6日（月）の朝と夕方、ここでは厳粛な追悼礼拝が執り行われ、そのたびに教会は人で溢れかえっていた。大主教の遺体はまだ棺に納められていなかった。棺がまだ準備できていなかったからだ。この数日間、私は日本での奉仕生活の中で初めて、驚くべき慣習を目にすることになった！ある有名なキリスト教徒のグループが、互いの合意のもと、夕方から故人の遺体の元を訪れ、朝まで徹夜し、福音書の朗読に耳を傾けていたのだ。

大主教の遺体は、聖イオアサフ・ベルゴロドスキーの聖遺物から採られた聖油で清められました。A・P・シネルニコワ氏からの寄付金により、谷中（上野地区）の墓地に小さな区画が購入され、2月22日にそこで埋葬が執り行われました。

朝、4つの祭壇で、ニコライ大司教の魂の安息を祈る4つの聖体礼儀が執り行われた。11時、キリスト復活大聖堂で告別式が始まり、その式は主に日本式で行われた。数ある花輪の中でも、日本天皇からの花輪がひととき目を引いた。外国人がこの榮譽に浴することは極めて稀であった。告別式の後、棺は大聖堂の周囲を巡り、霊柩車に安置された。10キロメートルにも及ぶ葬列は、墓地へと向かった。「風が我らの旗を激しく引き裂く。旗を半旗にして掲げるしかなかった。男子生徒、女子生徒たちが歩いている。皆、同じ制服を着ている。全員が手にヤシの枝を持っている。それは、日本における主教の事業が勝利するという信仰の象徴だ。数え切れないほどの花、何百もの花輪。聖像、十字架。聖職者、助祭たちは聖なる祭服を身にまとっている……多くの教理指導者はステヒアールを身にまとっている。完全な祭服を身にまとい、杖を手にした司教。司教の勲章。司教が身につけていた司教職のすべての装具。最後尾には、高価な棺を載せた馬車、金糸で刺繍された宮廷服を着たロシアの代表。そして、果てしなく続くキリスト教徒の列……」

聖ニコライ大聖堂

大聖堂建設の構想を実現するには、多額の資金と社会的な支援が必要だった。資金調達のため、アルヒマンドリト・ニコライはロシアへと向かった。1879年から1880年にかけて、彼はサンクトペテルブルク、モスクワ、カザン、キエフ、オデッサを訪れ、自発的な寄付を集めた。

ロシアでは、国民教育大臣であり、後に国務院議員となったエフィミー・ヴァシリエヴィチ・プチャティン伯爵が、常にこの宣教活動に多大な支援を寄せていた。1853年、プチャティン副提督は旗艦フリゲート艦「パラダ」号でロシア海軍にとっての「日本発見」を果たし、さらに両国間の外

交関係を樹立し、日本とロシア間の最初の公式友好条約に署名した。サンクトペテルブルクの社交界や政界で影響力のある人物であったプチャティンは、ニコライを実の息子のように扱い、宣教団の必要を愛情を込めて世話し続けた。提督の娘オルガもニコライ神父と親しく、1884年には修道女として来日し、彼の宣教活動を支援した。

日本における宣教活動の成功を見て、聖シノドは同地に司教を任命することを決定した。ニコライ自身以外に適任者は考えられなかった。1880年3月30日、彼はアレクサンドロ・ネフスキー大修道院で司教叙階を受けた。第二の故郷へ戻る途中、自発艦隊の蒸気船に乗船したニコライ司教は、パレスチナを訪れ、主の聖棺に参拝し、ヤシの枝を日本へ持ち帰った。

当初、将来の聖堂の設計図は、サンクトペテルブルクの建築家であるA・シュルポフ教授によって作成された。建物の平面図はギリシャ十字を彷彿とさせ、ドームはビザンチン様式で設計されていた。ニコライは、神田地区の駿河台（するがだい）の丘の頂上に土地を購入した。この場所には中世の頃、江戸（旧東京）港に入港する船舶の灯台を兼ねた火の見櫓が聳え立っていた。建設を指揮したのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、皇居を含む50棟以上の建物を東京に建設した英国人建築家ジョシュア・コンダーであった。7年後の1891年、コンダーはニコライ司教に「キリストの復活大聖堂」の鍵を手渡した。奉献式には、19人の日本人司祭と4,000人以上のキリスト教徒が出席した。一般に「ニコライ堂」（文字通り「ニコライの教会」）と呼ばれるこの正教会は、まもなく日本の首都の観光名所となった。ロシア人船員たちは、その輪郭に、ロシア海軍の主教会堂であるクロンシュタットの聖ニコライ海軍大聖堂の姿を重ね合わせていた。1923年に東京を壊滅させた大地

震の後、高層建築が相次いで建設されるようになるまで、好立地に建つこの正教会の大聖堂は、市内でも最も高い建物のひとつであった。このことは、「大聖堂が皇居より高くそびえ立つのは不敬だ」、「これはロシアによる横暴の表れだ」といった非難を招いた。

とはいえ、その建設規模や、大聖堂が日本の首都で占めた位置は、ニコライ司教という人物の偉大さと、当時彼が日本社会で果たすようになっていた役割に見合ったものであった。司教は絶大な尊敬を集めており、ロシアにも日本にも多くの崇敬者がいた。彼の権威は、東洋学に関する論文から国家間の関係に至るまで、極めて幅広い問題において頼りにされていた。ニコライ主教の外交手腕は、ロシア皇太子ニコライ・アレクサンドロヴィチに対する暗殺未遂事件として知られる「大津事件」の解決において、特に顕著に発揮された。

これは前代未聞の事件であった。日本天皇の招待を受けて来日し、同天皇から安全が保証されていたロシアの皇太子に対し、警護隊の一員である警察官が襲撃を加えたのである。日本は、スキャンダラスな外交的失態に直面しただけでなく、国家の安全保障さえ脅かされる事態に陥った。当時、皇太子を護衛していたロシアの軍艦7隻にとって、日本の全艦隊を殲滅することは朝飯前だったからである。ロシア側の怒りを物語っていたのは、傷が些細なものだったにもかかわらず、天皇が派遣した日本人医師の治療を拒否した事実であった。天皇自らが急いでニコライ・アレクサンドロヴィチのもとへ赴き、港まで見送り、さらにはロシア軍艦の甲板に上るという、当時の日本の君主としては考えられない行動をとった。この事態に、ロシア公使シェヴィッチとニコライ司教が介入した。ニコライ司教は特に熱心に働きかけ、とりわけ他の誰よりも、同名のニコライ皇太子に対し、日本と

の戦争に発展させないよう説得した。皇太子は日本天皇の謝罪を受け入れた。この事件は平和的に解決した。

1910年、ニコライの日本での奉仕50周年が盛大に祝われた。聖シノドは彼を大司教の位に叙した。ニコライには、日本天皇、東京知事、日本の報道機関、そして外国の使節団からも祝辞が寄せられた。東京知事の演説には、次のような言葉が含まれていた。「……高名な教師であるニコライ師（ ）がわが国にもたらした功績は、単なる宣教師としての成功にとどまらず、わが国の文明化に貢献した点にもあると私は考える……」

日本在住の他の外国人たちも、ロシア宣教団について熱狂的に評していた。ある英国の報告書には次のように記されている。「英国国教会の日本教会と並んで、日本における最高のキリスト教徒であるニコライ大司教の指導の下、素晴らしいロシア宣教団が存在している……」

司教ご自身は、ご自身の功績について次のように語られました。「農民が畑を耕すのに使う鋤に、果たして何か功績があるのでしょうか？ 鋤が『ほら、正教徒の皆さん、私がどれほど働きましたか見てください！』などと自慢できるのでしょうか……。私たちの役割は、鋤よりも高くないのです。農民が耕し終わると、鋤は使い古されてしまいます。彼はそれを捨ててしまいます。私も使い古された。そして、私も捨てられるだろう。新しい鋤が耕し始めるのだ。だから、よく見て、耕しなさい！ 誠実に耕しなさい！ たゆまず耕しなさい！ 神の御業が成長するように！

それでもやはり、神がまさにあなたを使って耕してくださったというのは嬉しいことだ。つまり、あなたも錆びついてはいなかったということだ。つまり、神の畑での仕事を通じて、あなたの魂も幾分清められたということだ。そしてこのことについて、私たちは常に神に感謝しよう。」

ニコライ・ヤボンスキーの言葉と教え

試練に備えて魂を整えよ

1887年7月の日本正教会総会における聖ニコライ・ヤボンスキーの説教

聖書にはこう記されている。「わが子よ！もしあなたが主なる神に仕えようとするなら、試練に備えて魂を整えよ。心を整え、堅固であり、試練の時にも動揺してはならない。主にすぎり、決して離れるな。そうすれば、最後にはあなたが栄光を受けるであろう。あなたに何が起ころうとも、喜んで受け入れ、屈辱の変転の中でも忍耐強くあれ」（シラ書 2:1-3）。ここに集う私たち皆は、もちろん、神のために働くことを始めました。それゆえ、神に仕えるとは、自らを労苦に駆り立てることであることをよく知っています。しかし、私たちはこの奉仕の中に大きな喜びも秘められていることを知っています。なぜなら、全知なる神は、御自身のために働く者たちを見守られるだけでなく、彼らを助け、慈愛をもって彼らを愛しておられるからです。しかし、神に仕える道は、危険や躓き、弱さや転倒に満ちています。それゆえ、聖書は私たちに、もし主なる神に仕えたいと願うなら、誘惑に備えて自分の魂を整えよと教えています。

試練には二種類あります。第一は、上からの試練であり、第二は、下からの誘惑です。上からの試練について、聖書は次のように語っています。「金や銀が火で試されるように、神は人の心を試される」（箴言17:3）。金には、純金もあれば、不純物を含むものもあり、偽物さえあります。火に

よる試練において、純金は一切の損傷を受けることなく、むしろさらに美しいものとなります。不純物を含む金からは、その純粋な部分が分離されます。そして、偽物の金は、最終的には何の価値もないものへと変わってしまいます。同様に、人間の美德も、本物であることもあれば、自惚れや高慢、あるいは他の情欲と混ざり合っていることもあり、また、偽善的なパリサイ人たちのように、まったくの偽物、本物ではないものもある。このように、上からの試練は、人間の美德の質を決定づけるのである。神は初めから人の心を知っておられる。それゆえ、試練が送られるのは、神が私たちの美德がどのようなものであるかを知るためではなく、人自身のためである。すなわち、もし人がその美德の中に偽りや偽装の混じり気を見出したならば、悔い改め、善へと立ち返るためである。私たちもまた、上からのこのような試練を欠くことのないようにしよう。

しかし、これ以外にも、もう一つの種類の誘惑が存在します。それは、悪魔から来る誘惑です。悪魔は人の思考に闇を植え付け、その心に様々な不純物を注ぎ込み、人を混乱に陥れ、こうして、神に仕える人々の魂を神から遠ざけることを目的として、人を悪行へと導くのです。

神に仕えることを始めた私たちは、常に、自分たちがこうした誘惑や惑わしの真っ只中にいることを心に留めておかなければなりません。聖書にはこう記されています。「目を覚まし、警戒しなさい。あなたがたの敵である悪魔は、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうとしてうろついているからです」（ペトロの手紙一 5:8-9）。すべての教理指導者や司祭は、悪魔の鋭い注視の下に置かれており、悪魔は彼らを打ち負かそうとして、数多くの火の矢を放っている。これらの矢の中で最も有害なのは、自己満足と高慢である。なぜなら、多くの教理指導者はまだ非常に若いうちに説教の現場に送り出され、人々はすでに彼らを教師や指導者と呼んでいるからだ。悪魔がこれを利用

して、彼らに容易に高慢を植え付けるのは驚くに値しない。そして、すでにどれほどの教会の奉仕者たちが、この矢によって打ち倒されてきたことか！ 私は毎年多くのカテキスタを輩出しているが、そのうちの少なからぬ者が倒れてしまう。その原因は何だろうか。すべては自己満足と高慢によるものである。もしクリスチャンの誰かが彼らを諭そうとすれば、彼らはかえってそれに怒りを覚えるのである。悪魔には他にも多くの燃える矢があり、それを使って自分に抵抗できない者たちを打ち倒します。カテキスタのリストから除外された者たちは、例外なくその類に属しています。兄弟たちよ、神のために働き始めたものの、試練に耐えきれず倒れてしまった者たちが、どれほど多いことか。なんと嘆かわしいことでしょう！

それゆえ、私たちが常に誘惑に備えておくことは極めて重要です。なぜなら、それこそが私たちの力の基盤だからです。もし私たちが備えを怠れば、常に誘惑に打ち負かされてしまうでしょう。そのような者たちを、悪魔は自らの矢で打ち、殺してしまうのです。今、公会議の開幕を前に、私は過去を振り返り、未来を思い描く中で、これらすべてを、最も重要かつ不可欠なこととして、皆さんに語らなければならないと決意しました。

誘惑に備えるために、私たちがどのような方法を講じるべきかについては、聖書が明確に教えています。

第一に、「あなたの心を整えよ」（シラ書 2:2）、すなわち、あなたの心を守り、行いを正し、美德を身につけなさい。そうすれば、誘惑に陥ることを避けられるでしょう。まるで船のように、もしそれをしっかりと見守り、適切に操縦すれば、嵐も荒れ狂う波も恐れることはありませんが、もししっかりと見守らなければ、難破する危険があります。また、馬も、適切に操らなければ暴走

し、ついには 転覆したり穴に落ちたりする可能性があるのと同様に、人の心も、もし適切に管理しなければ、どうなるでしょうか？ ただ、悪魔が私たちに近づき、私たちの心に様々な邪悪な企みを吹き込み、私たちの心と行いを混乱させるだけである。

第二に、「忍耐強くあれ」。人間は本来、悪に傾きやすいものである。したがって、誘惑に打ち勝つためには、あらゆる種類の苦労や苦難を喜んで耐え、自制し、自分の心を真理へと向ける必要がある。もし私たちが苦労や悲しみに耐えなければ、何一つ乗り越えることはできません。なぜなら、苦労や悲しみなしに、誰が敵に打ち勝つことができるのでしょうか。

第三に、「神にすがり、神から離れるな」（シラ書 2:3）。神にすがりつけば、私たちはどんな誘惑の中でも安全である。それは、港にたどり着いた船が、もはや嵐を恐れないのと同じである。

兄弟たちよ、私は公会議の開始に先立ち、このように申し上げたいと願いました。どうかこの言葉を心に刻み、大切に守っていただきたいと思います。

マカリー（ネフスキー）大主教への手紙より¹

昨年11月4日付の貴殿からの心温まる手紙を、12月30日に受け取りました。その知らせは悲しいものではありませんでしたが、感謝申し上げます。対外戦争における一連の敗北、国内での絶え間ない動乱と流血——どうやら神はロシアを見捨てられたのか、あるいは、むしろ、神の御手は、この哀れな祖国を懲らしめることに倦むことがないのです！ しかし、もちろん、私たちは、これが——不法にまみれた御子を正そうとされる、慈愛に満ちた父の懲らしめる御手であると固く信じております。この信仰こそが、ロシアの上に、多くの稲妻と雷鳴を孕んでいると思われる暗雲が依然として垂れ込めている、この暗黒の日々における私たちの唯一の慰めです。「今や私たちはあなた方を羨ましく思う」と、お書きになりました。確かに、ここには革命はなく、平穏です。しかし、心の不安は、あなた方のところよりもむしろ大きいかもしれません。その思いは、誰とも分かち合ったり、語り合ったりする相手がいないがゆえに、なおさら苦痛なものなのです。

この地の教会については、神に感謝して、すべて順調である。戦争中よりも説教ははるかに活気を取り戻している。これは、捕虜の世話をしていた司祭たちが、それぞれの信徒たちの元へ戻ってきたためである。さらに、戦時の硝煙とともに、ロシアから伝わった正教会に対する偏見——まるでそれが日本を征服するための策略に過ぎないといった類の——も一掃されました。数名の若い教理指導者が戦地に徴用されましたが、帰還するとすぐに再び教会の奉仕に就かせてほしいと願い出て、

¹ 聖マカリー（ネフスキー）、モスクワ・コロメンスク都主教（1835–1926）。モスクワ・コロメンスク都主教（1912–1917）、アルタイ都主教（1920年より）、傑出した宣教師であり、アルタイ諸民族の啓蒙者。

熱心にその務めを続けています。教義を学ぶ人々は至る所におり、司祭たちからは洗礼が執り行われたという報告が頻繁に寄せられています。今年の総会は特に盛大になるでしょうし、神の御加護があれば、今まさに教会に新たな活力を吹き込むことでしょう。要するに、ここではすべてが心を奮い立たせてくれます。ただ、私には助手がいないのです。私はすでに年老いて——片足を墓場に突っ込んだようなもので——70歳になり、独り身ですので、教会を託す相手がいません。これが私の常なる悲しみです。ただ、ここには一つの慰めがあります。教会の仕事は私たち個人のものではなく、皆のものであるということです。私たちはただに仕える者であり、主人がどのようにお決めになるか、その通りにあるがよいのです！

この地における教会の宣教活動に対し、大司教様のご祝福と聖なるお祈りを謹んでお願い申し上げますとともに、この地の宣教活動と教会に対する大司教様の慈愛に満ちたご配慮に対し、心からの献身と深い感謝の念を捧げ、ご配慮に対し、心からの献身と深い感謝の念を捧げ、貴殿の最も謙虚な従者であり、祈りを捧げる者として、ロシア日本宣教団長

ニコライ、レヴェル司教
東京、1906年4月14日

*** **

大主教様、慈悲深き大牧者であり父なる方！

貴殿からの尊いお手紙と、二冊の尊い贈り物を、すでに随分前に拝受いたしました。その両方に対し、貴殿に心より深く感謝申し上げます。書籍は読み終え、装丁を施し、宣教団図書館の目録に

登録いたしました。これは、寄贈者の永遠の記念として、また読者の益となるためです。お手紙への返信として、まず第一に、長きにわたる奉仕と、私には全く不相応な大司教の位について、兄弟のようなお祝いの言葉をいただき、心からの感謝を申し上げます。後任としては、かつてここで奉仕していたものの、神経衰弱を患って去ってしまったアルヒマンドリト・アンドロニク[・ニコルスキー]氏²を期待しております。現在、彼はウファ神学校の学長を務めており、病気からはどうやら完全に回復したようです。聖シノドは、彼を副司教の位でここに派遣するつもりであるようですが、私はそれを大変喜ばしく思います。なぜなら、アンドロニク大修道院長は、優れた宣教師に必要な精神的な資質を十分に備えているからです。あなたが日本人を愛し、彼らについてこれほど温かい評価をしてくださることを、私はいつも嬉しく思っています。そして、「日本へ宣教師として奉仕しに行きたい!」というあなたの優しいお言葉には、どれほど勇気づけられ、光栄に思っていることか……。その言葉だけで、私は自分の人生が完全に無駄だったとは考えずに済みます。

お手紙の後半部分は暗い内容ですが、それが書かれた以来、光明は見えず、私たちの哀れな祖国の上には闇がますます濃く立ち込めているのですから、なおさらです。新聞は、殺人、強盗、ストライキ、学生たちの怠惰、神学校生の乱行など、といった記事の欄に差し掛かると、いつも手から落ちてしまいます。教会会議は、おそらく状況が多少落ち着くまで延期されるだろう。そうでなければ、たとえ最も良き決定でさえも曲解され、着手された改善策も過大評価されたり歪曲されたりしてしまうからだ。

² アンドロニク（ニコルスキー）（1870年 - 1918年）、ペルミおよびクングルの大司教、殉教者。

ここでの宣教活動と教会については、神に感謝して、すべて順調で、通常通り進んでいる。私は主に礼拝の翻訳に忙殺されている。現在はオクトイヒの第四声期が進んでおり、のスラブ語テキストにあるすべてを完全に翻訳している。そしてまさにここで、礼拝のロシア語への翻訳、あるいは少なくともスラブ語テキストを分かりやすい形に整えることがいかに必要であるかが分かるのだ。時には、たった一節の意味を理解するためだけに、30分以上も立ち尽くすことがある。また、いくら頭をひねっても全く理解できず、その場その場で神が与えてくださる思いつきで、理解できない部分を置き換えてしまうこともある。公会議の喫緊の課題の一つは、礼拝用テキストを修正するための委員会を設置することであるべきですが、その作業を百年も引き延ばすような、長引く委員会であってはなりません。

書籍の件で貴殿に借りを残したくはございませんので、貴殿からいただいた二冊への返礼として、ここから貴殿に二冊をお送りいたします。一つは、当地の教会への教訓として出版された、当公会議の図解付き解説書、もう一つは日本語の詩篇集です。お許してください。手元にあるもので精一杯の贈り物です。

私およびこの地の教会全体のために、大司教様のご祝福と聖なる祈りを賜りますようお願い申し上げますとともに、真の敬意と心からの献身、そして兄弟愛を込めて、大司教様の最も謙虚な従者であり、祈りを捧げる者として、光栄に存じます。在日ロシア宣教団長

ニコライ、レヴェル司教
東京、1906年9月18日

結び

正教の光によって日本を啓蒙した最大の功績は、傑出したロシア人宣教師であり、「日本の使徒」と呼ばれるニコライ大主教に帰属します。彼は19世紀半ば、日の出ずる国において福音を宣べ伝える奉仕に着手しました。聖ニコライ・日本大主教は、その後半世紀にわたりたゆまぬ活動を展開することとなる人々の言語や生活様式の研究に、労力と時間を惜しまなかった。その甲斐あって、その成果は目覚ましいものとなった。孤独な宣教師・修道者から、数十人の日本人司祭と数万人の信徒を擁する教会の長へと変貌を遂げたのである。今日、日本自治教会は、多宗教的な伝統、知識層の科学中心主義的な気風、そして新宗教的な宗派や団体の攻撃性といった、ポスト産業社会である日本の複雑な世界の中で存在している。

この国におけるキリスト教宣教の歴史において、聖使徒同等のニコライ大司教ほど、この称号にふさわしい人物は他にいない。

聖使徒同等の父ニコライよ、私たちのために神に祈ってください！

宣教リーフレット **A33**
編集者：アレクサンドル（ミレアント）司教